

7.分離

マデサゴーラは変わり者の大魔王だった。

かつてアストルティアに侵攻した数々の大魔王がいた。その動機は魔界内での政治的なものから、個人的な征服欲、復讐、嗜虐など様々であるが、マデサゴーラは一人の芸術家として、アストルティアを一つの偉大な芸術作品と見立て、その想像主たる女神ルティアナに挑戦しようとしたのである。

具体的には、ルティアナが残した創生の力を用いて、現在のアストルティアの有りようを模した、しかし彼好みの脚色を施したもう一つの世界を丸ごと作り出し、やがてはそれを以って、現実のアストルティアを塗り替えてしまおうという稀有壮大なものであった。その試みは半ばまで成功し、彼の生み出した「偽りのレンダーシア大陸」は、彼が滅びた後も存在し続け、今やそこで生み出された住人たちが、彼の思惑をも超えて、独自の未来を模索して歩みだしている。その趣味の方向性はともかく、偉大な創作事業であったことは間違いないだろう。



モチーフの入念な観察は、芸術活動の第一歩である。マデサゴーラもその例にもれず、侵攻前にレンダーシアの詳細な調査を行った。その過程で、奇妙なものが見つかった。アストルティアには、女神ルティアナの被造物ではない、他の世界からの侵入者であると思われる存在がいくつか確認されている。レンダーシアを囲む五大陸に複数体確認されている「太古龍」も、そのような存在であると彼は睨んでおり、それらに対する関心も少なからず持っていた。目下の目標であるルティアナとは直接関係のないものなので、積極的な干渉は避けていたのだが…。ある時、レンダーシアに住む人々の見る夢の中に、一体の龍が生まれかけていることを、彼は発見する。それはまだ実体を持っておらず、人々の想像力そのものによって養われており、いずれ十分な力を蓄えた時に本物の龍として現実の世界に現れるものと思われた。

その龍の性質が、現在確認されている「太古龍」たちとよく似ていたのである。異世界からの侵入者である太古龍と同じものが、ルティアナの創造物から副次的に生まれようとしている…。このことはマデサゴーラの好奇心を大きく刺激した。彼はまだ眠っているその龍をひそかに捕らえ、ルティアナへの挑戦の前哨として、一つの実験的な創作を行ったのである。

夢とはひとが眠っている間に垣間見る幻想。転じて未だ見ぬ未来に憧れや野心を投影して思いを馳せる空想である。また不安や恐怖が反映された夢を見ることもある。マデサゴーラ自身も何度も作品のテーマに取り入れてきた魅力的な題材だ。

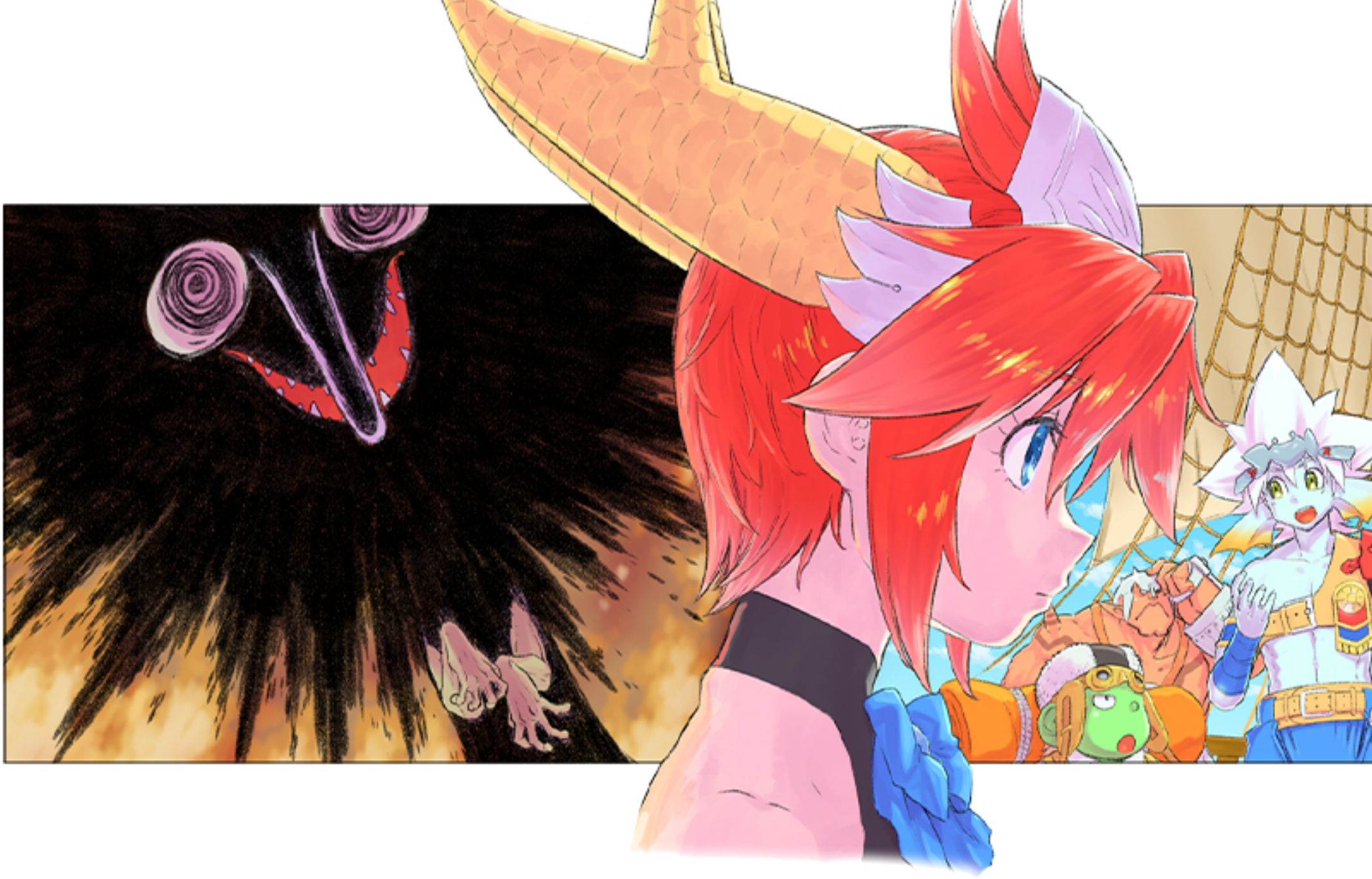
その龍が生まれれば（その龍が「^{レムノ}夢現」と他の太古龍たちから呼ばれていることも彼は調査していた）、人の空想を思うがままに現実を引き出すような、さぞ面白い存在となることだろう。しかし彼としてはそれでは刺激が足りない。夢を夢として穏やかに見守るような存在ではなく、夢に狂うような、激しい情熱や苦悩、葛藤を生み出してほしいのである。

彼は生まれつつあったその龍を二つに引き裂き、それぞれに偏った夢の性質を振り分けた。すなわち好奇心や希望、憧れなどを反映した夢と、未知の未来への不安や恐怖、嫌悪や絶望を反映した夢である。前者を「夢幻<レムネア>」後者を「火の夢<レムナス>」と名付け、もう一度人々の夢の中に解き放った。そして晴れてそれがこの世に顕現した時に生み出すであろう、様々なドラマに思いを馳せて数点の作品を残した…。

ユルールたちから送られた手紙には、太古龍レムノの誕生と失踪にまつわる内容が、詳細につづられていた。魔界での冒険の傍ら、ゴーラ郷の住民の手も借りて調査してくれたらいい。

アズリアと一連の事件の黒幕である悪夢龍レムナスの出自について、これで殆どのが判明したことになる。かつてルシナ村の沖に出現した嵐の龍たち、その白い片割れがアズリアの力の本来の主、<原質>たる夢幻龍レムネア。そして黒い龍が悪夢龍レムナスであることはまず間違いないだろう。しかしまだいくつかわからないこともあった。アズリアと、彼女たちの前に立ちふさがる例の「黒モヤ」は、それぞれレムネアとレムナスの<仮面>であるはずなのだが、なぜ本体から離れて行動しているのか？なぜアズリアが安定した人の肉体を備えているのに、レムナスの仮面はあのように不安定な存在なのか。

溶岩流ブライドンの話によれば、アズリアは<原質>と<仮面>が分かれきっていない特殊な状態なのだという。ならば、レムナスの方は…？



他の者たちが残った謎に頭を悩ませる中、アズリアにはなんとなく、事態の概要がわかりかけていた。自分がこのアストルティアに生まれ落ち、ソウラから名前をもらってこのかた、この世界は美しく豊かで、その奥深さは彼女の好奇心や冒険心を刺激してやまなかった。

生きることは楽しく、優しく、時に感じる痛みや悲しみも、過ぎてしまえば生きる喜びを引き立てるスパイスだったかのように、それを乗り越えようという意欲が萎縮することはなかった。

この感じ方が、もともと夢幻の龍として自分に備わっていたものから来ているのだとしたら、レムナスにはこの世界が一体どのように見えていたのか。

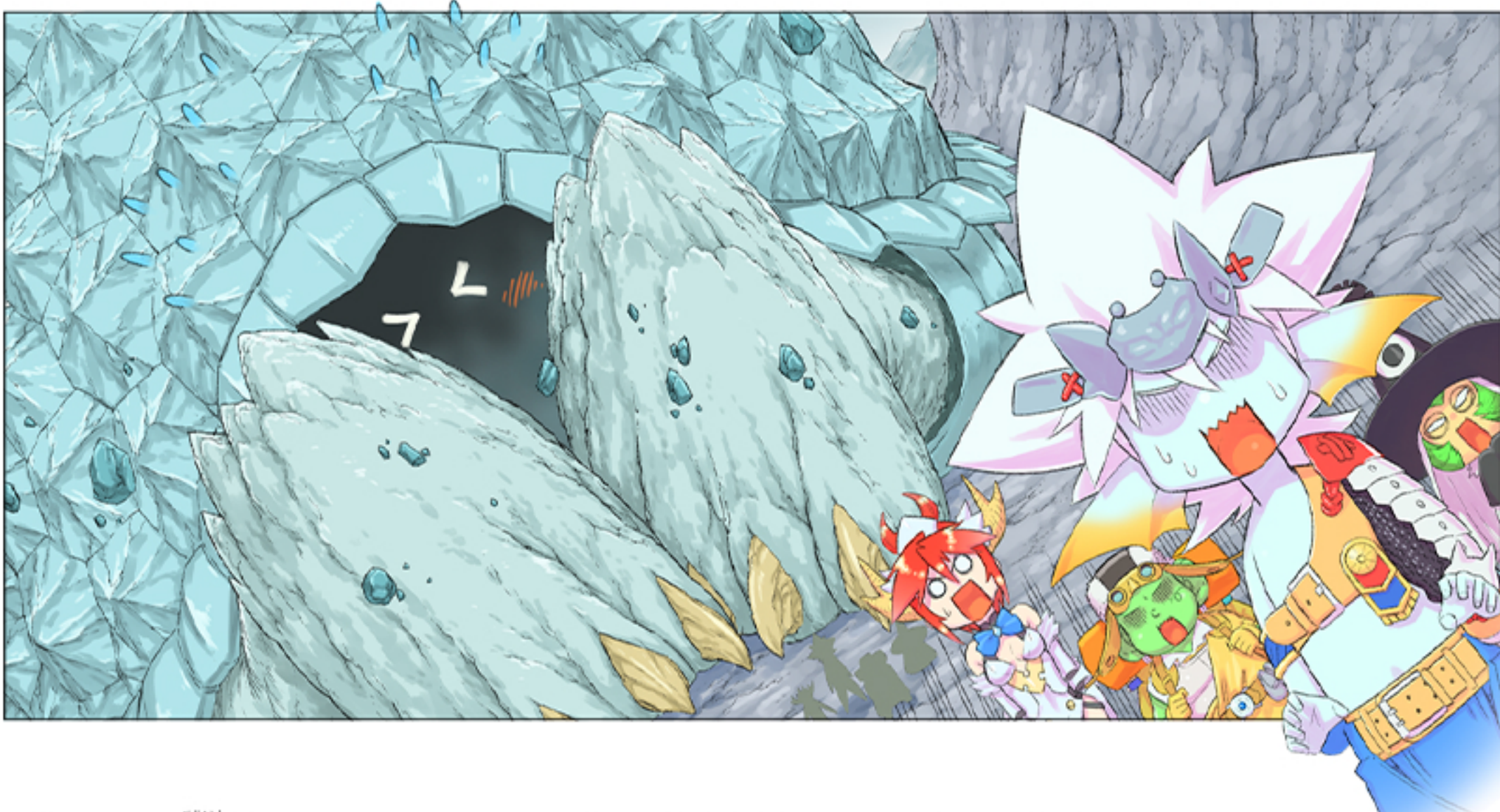
それは悲しく、そしてとても危険な予想であった。レムナスや、その仮面が求めているものは、征服とか、滅びとか、そんな単純で破壊的なものではなく…

一行は旅路を急いだ。

オーグリード大陸北部。ランガーオ村の闘技場をさらに分け入った山地の深奥は、雪と氷に閉ざされたまさに秘境だった。人の足で踏破することなど不可能かと思われたが、旋龍マクールに教わった抜け道を辿ることによって、なんとか獄龍ノ口の居座たる北嶺の大盆地にたどり着いた。

たどり着いたが、そこに盆地などなく、その盆地をそのまま埋めるように山があり、その山がノ口であった。ブライドン、ホルヘイズ、マクール、今まで出会ってきた太古龍たちも大きかったが、ノ口はその二回り以上大きい。歩き回ってその全体像を把握するのは困難だったが、見えている範囲から想像するに、山のような甲羅を背負った、巨大な亀のような姿をしているようで、その首と思わしき部分には巨大な洞窟の入口があって、その奥から一行をのぞき込む巨大な眼が…！

見えたと思ったら、洞窟の入り口が閉じた。



獄龍ノ口の仮面は、ものすごくシャイで、恥ずかしがり屋さんだったのである…！